



もくじ



—はじめに—

難聴理解学習ガイド作成にあたって

難聴理解学習の意義	1
難聴理解学習の進め方	2
難聴理解学習実施までの流れ	3
難聴理解学習を行うにあたって	4
難聴理解学習 各学年の進め方	5
小学校1・2年生 難聴理解学習進行案(例)	6
小学校3・4年生 難聴理解学習進行案(例)	7
小学校5・6年生 難聴理解学習進行案(例)	8
中学生 難聴理解学習進行案(例)	9
難聴理解学習 使用教材一覧	10
難聴理解に関する参考図書	12
聴覚障害についての基礎知識(きこえ、補聴器・人工内耳)	13
補聴援助システム	17
難聴理解学習の事例紹介(平成29年度)	18

難聴理解学習ガイド作成にあたって

秋田県立聴覚支援学校きこえとことば支援センターでは、児童生徒向けの難聴理解学習や難聴理解研修（職員対象）を支援しています。聞こえない、聞こえにくい児童生徒がよりよく学校生活を送るにあたっては、聞こえない、聞こえにくいことを周囲の人が理解していることがとても重要になります。

難聴理解学習では、実際に聞こえにくい状況の体験を通して、周囲の人が聞こえにくい人の立場に立って考えることや、相手を思いやる気持ちを育むことを目的としています。

平成28年度に難聴学級担当者からご協力いただいたアンケートでは、難聴理解学習を聴覚支援学校に依頼する理由として、以下のような内容がありました。

難聴学級担任アンケートから
～聴覚支援学校に行ってほしい理由～

	理由について ※()内は経験年数
理解 (授業内容・ 障害理解)	<ul style="list-style-type: none">・どのように進めていけばよいか分からないから。(1)・指導の仕方が自分では分からない。(2)・自分の理解が深まっていない。(2)
授業展開	<ul style="list-style-type: none">・進め方や話し方が子どもにとって効果的だから。(1)・理解学習に使う教材がそろっているから。(1)・めあてに向かって素晴らしい展開がされているから。(1)・実態に合った内容を選んでくれて、話も分かりやすく且つ説得力があるから。(3～4)
専門性	<ul style="list-style-type: none">・慣れない者がやるより、正確に大事なところを伝えることができるから。(1)・専門家で説得力があるから。(1)・難聴児の実状や配慮に関して詳しい職員が行った方が、理解が深まる(1)・専門の先生のお話を聞くことで、特別な気持ちで子どもたちが、授業に参加することができるから(2・3～4)

児童生徒の難聴理解を育む上では、聞こえない、聞こえにくい児童生徒が在籍する学校の職員全体で継続的に難聴理解を促していく必要があります。そこで、実際に学校で計画または指導するにあたり、それぞれのニーズに合わせて参考にさせていただけるよう本ガイドを作成することにしました。

難聴理解学習の意義 ※

(1) 基本的な考え方

難聴児童生徒が通常の学級で学習や生活をする場合、さまざまな誤解やトラブルを生じることがあります。その原因の一つに、学級の子どもたちが難聴を理解できていないことがあげられます。そこで、発達年齢に応じて、またその難聴児童生徒の難聴の程度に応じて、学級の子どもたちが難聴についての理解を深めていくことが大切になります。このことは、将来、子どもたちが社会で共に生きていくために重要であり、また、難聴児童生徒自身が積極的に生きようとする姿勢を育むことにもつながります。

(2) 学級の児童生徒への意義

- ・難聴児童生徒のきこえ方や適切な援助などの理解ができる。
- ・互いに理解し合い、相手の立場に立って行動しようとする態度を育てることができる。
- ・学級の一員として、協力してよりよい生活を築こうとする態度を育てることができる。

(3) 難聴児童生徒への意義

- ・自分のきこえ方や必要な援助などの確認ができる。
- ・難聴に伴う困難や適切な援助について、周りの人に伝えようとする態度を育てることができる。
- ・難聴や自分の気持ちについて伝えることにより、難聴に伴う孤立感や疎外感を軽減できる。

(4) 学級児童生徒の保護者への意義

- ・「難聴理解の学習」を参観することにより、難聴児童生徒への理解が深まる。
- ・難聴児童生徒やその保護者との、日常的な交流が広がる。

(5) 難聴児童生徒の保護者への意義

- ・学校生活での支援について知ることができる。
- ・「難聴理解の学習」後の感想から、児童生徒の気持ちを知ることができる。

(6) 学校の教職員への意義

- ・難聴児童生徒への理解が深まり、学校生活での配慮が強く意識される。
- ・学級担任の不安感が解消される。

※ 『難聴児童生徒へのきこえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために』
第3部 学級の児童生徒（健聴児）に対する「難聴理解の学習」 P 19
平成16年12月25日 発行 発行者 財団法人日本学校保健会

1 難聴理解学習の進め方 ※きこえとことば支援センターに依頼する場合

①計画

・きこえない、きこえにくい児童生徒の実態を踏まえ、どんなことをねらうのか、どんな姿を期待するのかを考え、難聴理解学習を含めた年間の指導計画を立てることが大切になります。（総合的な学習の時間、道徳、自立活動・・・）

②相談・依頼

・きこえとことば支援センター（秋田県立聴覚支援学校支援部）にご連絡ください。
年度初めにご連絡いただくと日程の調整がしやすくなります。遅くとも理解学習の1ヶ月前までにはご相談ください。
・事前打ち合わせで日程や内容が決まった後、派遣依頼文書を送付していただきます。

③本人・保護者の承諾

・きこえない、きこえにくい児童生徒本人はもちろんですが、保護者の了解をいただいた上での実施となります。理解学習を実施する目的などを伝え、可能であれば保護者に参観してもらうことで、より一層、連携した支援につながります。

④事前打ち合わせ

・基本的に、きこえとことばの支援センターの職員が在籍する園や学校に訪問して事前打ち合わせを行います。きこえない、きこえにくい児童生徒の様子を伺いながら理解学習でのねらいや具体的な内容をご相談します。

⑤事前・事後指導（本ガイド4P）

⑥難聴理解学習（本ガイド4P）

⑦アンケート

・理解学習実施の約3ヶ月後、きこえない、きこえにくい児童生徒や交流学級の様子などについてアンケートを依頼します。難聴理解学習を含めた学校へのサポートについて、当センターの評価に活用させていただきます。ご協力お願いいたします。

⑧振り返り・次回への提案

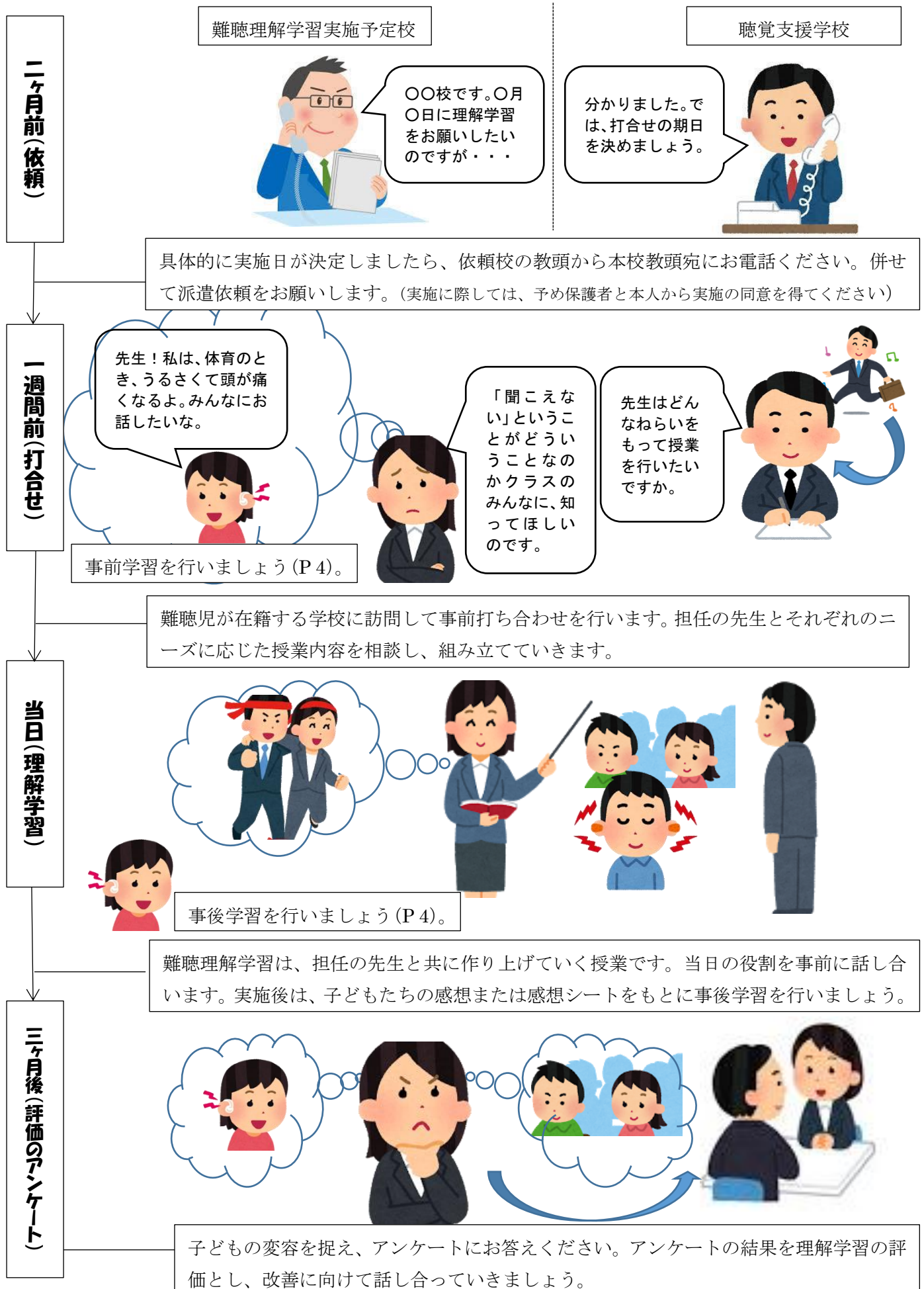
・理解学習後の児童生徒の感想やアンケートの結果を踏まえて、支援の成果と課題をまとめます。必要に応じては、次年度以降の難聴理解学習の進め方を話し合います。在籍校の次年度の計画に反映していただければと思います。

難聴理解職員研修

きこえない、きこえにくい児童生徒とその周囲の児童生徒が適切な関わり方をしていくためには、まず学校職員がきこえない、きこえにくいことを理解し、見本となつて関わり方のモデルを示すことが大切になります。また、普段から周囲の児童生徒へよりよい関わり方を働きかけるとともに、きこえない、きこえにくい児童生徒の障害認識を深める意味でも、職員がその立場に立って考えることのできる難聴擬似体験をお勧めします。

※特別支援教育セミナーで職員研修をすることもできます。ご相談ください。

2 難聴理解学習実施までの流れ



3 難聴理解学習を行うにあたって



1. 年間計画を立てましょう。(自立活動・総合的な学習の時間・道徳・特別活動等で実施)
2. 事前・事後指導を行いましょよう。

事前・事後指導の具体的な内容・・・難聴理解学習のねらいに合わせて、内容をそれぞれ選択してください。

事前指導の例

小学校

他児童	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚支援学校について調べる。 ・聴覚障害のある人たちに関わる生活機器を調べる。 ・聞こえにくい人が登場するドラマや漫画等を視聴する。
難聴児	<ul style="list-style-type: none"> ・難聴理解学習を行うねらいについて理解する。 ・ふだんの生活でどんなことに困っているかを考える。 ・自分が難聴理解学習で友だちに伝えたいことを考え、原稿を書く。発表練習をする。

中学校

他生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害のある人たちに関わる生活機器を調べる。 ・コミュニケーションの方法（手話・指文字・筆談・ジェスチャーなど）について知る。 ・聴覚障害者の著した体験談等を読む。
難聴児	<ul style="list-style-type: none"> ・難聴理解学習を行うねらいについて理解する。 <u>交流学級だけではなく、学年または学校全体が対象となる場合は、それについても言及する。</u> ・ふだんの生活でどんなことに困り、どのように改善したいかを考える。 ・聴覚障害者の著した体験談等を読む。

事後指導の例

小学校

他児童	<ul style="list-style-type: none"> ・感想シートに書いた内容を振り返り、今後どのようなことに気をつけるとよいかを確認する。 ・コミュニケーションに関しては、難聴児の困り感に配慮し、どんな約束が必要かを話し合う。
難聴児	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の書いた感想シートを読み、友だちが障害をどのように理解しているのかを知る。 ・自分で話した内容が伝わったかどうかを感想シートから読み取る。 ・発表の際の発音や、伝えるための工夫は良かったかを自己評価する。

中学校

他生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・感想シートに書いた内容を振り返り、今後どのようなことに気をつけるとよいかを確認する。 ・コミュニケーションに関しては、難聴児の困り感に配慮し、どんな約束が必要かを話し合う。
難聴児	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の書いた感想シートを読み、他者の障害への理解を知る。 ・自分で話した内容が伝わったかを感想シートを参考に考える。 ・友だちができることと、自分がしてほしいと思っていることの共通点・相違点について考える。



難聴理解学習の内容を定着に結びつけるためには、日頃の継続した指導が必要です。そのためには、計画的な事前・事後指導が大切です。上記したものは、あくまでも例です。理解学習を実施する学級の児童生徒と難聴児本人が、日頃どのような関わりをしているか、「障害観」はどれほど培われているか、しっかり見極めて授業の内容を検討していきましょう。

(参考資料：「難聴児童生徒への聞こえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために」 日本学校保健会 平成 16 年)

	導入 (在籍校担任)	内容 (聴覚支援学校職員)	まとめ (担任の先生あるいは聴覚支援学校職員)
小学校 1, 2年	今回は、耳の聞こえない、聞こえにくい人たちが使っている補聴器について取り上げてみます。～「補聴器って、なあに？」	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器の仕組みを知ろう ・補聴器の取り扱いについて知ろう ・補聴器を使っている友達となかよくなるコツ (難聴理解カルタを用いて) ・補聴器の音を聞いてみよう (試聴器) 	<p><分かったことのまとめ></p> <p>～高価なものである。そばでは大声で話さない。丁寧に扱う。話者は正面から話しかける など</p> <p>・補聴器を使っている人と生活する上での約束～話をするときには？ 遊ぶときは？</p>
小学校 3, 4年	世の中には、様々な人が生活をしている (大人、子ども、赤ちゃん、老人、日本の国で暮らす外国人、車いすの人、目の不自由な人、耳の聞こえない、聞こえにくい人、助けの必要な人…) どのように関わっていく (仲良くしていったら良いか) のかを考えてみよう。 今回は、「聞こえない、聞こえにくい」ということについて考えてみよう。	<p>～聞こえない、聞こえにくい体験をしよう～</p> <p><補聴器体験をしてみよう (試聴器) ></p> <p><耳栓をして、聞いてみよう></p> <p><大事な話が聞こえないと? (高度伝音難聴体験) ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・順番に指名される～答えられるかな? ・みんなで一緒に〇〇をする ～何をしているの? ・話合いをする ～みんなの輪に加われない… <p>(例)</p>	<p><感想の共有をする></p> <ul style="list-style-type: none"> ・補聴器を聞いてみてどんな感じがした? ・シミュレーション DVD を見て、どう感じた? ・聞こえない、聞こえにくい友達ともっと仲良くなるために考えることって?
小学校 5, 6年 ・ 中学生	い」ということについて考えてみよう。	<p>～聞こえない、聞こえにくい体験をしよう～</p> <p><耳栓をして、聞いてみよう></p> <p><コミュニケーションができない (高度伝音難聴体験) ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・順番に指名される～答えられるかな? ・みんなで一緒に〇〇をする ～何をしているの? ・話合いをする ～自分の意見が言えない ・突然の行動についていけない ～何が起こったの? (例) 	<p><感想の共有をする></p> <p>～自分だったら、どうしてほしいか</p> <p>～自分にもできるお手伝いって? ～どうすれば不便さが取り除けるか</p> <p>～自分にできる支援とは?</p>

・理解学習の初回が中学年以降の場合は、補聴器の仕組みや聞こえにくさのシミュレーション等の内容を付加して実施していく。

・耳栓を使用するのは4年生以降、ヘッドホンを使用して難聴の状態を体験するのは高学年以降としておく。

小学校1・2年生 難聴理解学習進行案（例）

時間	学習活動	留意点	準備物
3分	1 本時のめあてや活動内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいの確認を行う。 (例) <ul style="list-style-type: none"> ・「補聴器ってなあに」 ・「聞こえないお友だちと仲良くなろう」 	掲示物
5分	2 補聴器の役割を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器には、小さいマイクとスピーカーがあり、音声を増幅する器械であることを簡単に紹介する。 	補聴器の図
7分	3 補聴器の取扱いについて知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・注意点を押さえる 「高価である」 「水や汗にぬれると壊れる」	掲示物
10分	4 難聴理解カルタを使って大事なことを確認する。	「衝撃に弱い」	理解カルタ
5分	5 補聴器の試聴をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・担任の先生のみ体験を依頼する。周囲の音がすべて増幅されるのでうるさく感じるなどを感じて話していただく。 ・紙を動かす音、生活音などをきいていただく。 	環境音 スピーカー 試聴用補聴器
5分	6 聞こえにくい友だちと仲良くなるための約束を確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・約束①「ほちょうきは、たいせつににしよう」 ・約束②「ほちょうきのそばで、耳元で大きな声を出さない」 ・約束③「きこえにくい人に、「はっきり、ゆっくりめに話す」 ・約束④「まわりの音も大きくするから、しずかに話をきこう」 	約束 4枚
10分	7 学習のまとめ（感想発表）をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・感想シートを準備し、それにまとめる。 ・感想発表をして、クラス全体で共有する。 	感想用紙

小学校3・4年生 難聴理解学習進行案（例）

時間	学習活動	留意点	準備物
5分	1 本時のめあてや活動内容を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・めあての確認をする。 (例) 「聞こえない、聞こえにくいということについて考えてみよう。」	めあての 掲示
5分	2 これまでの難聴理解学習の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・補聴器がどんな器械だったか確認する。 ・仕組みを確認する。 (マイクとスピーカー／電池で動く) ・取り扱いの注意事項を確認する。(簡単に) <周囲はどのような配慮が必要か確認する> 	掲示物
5分	3 聞こえ方シミュレーション DVD 視聴する。	「補聴器をつけたとしても、『もごもご』と聞こえることには変わりはなく、とても曖昧な聞こえ方である」ということを知ってもらおう。	DVD
20分	4 補聴器体験をする。 どのように聞こえるのかな (全員または代表者数名) <体験の約束> ①おしゃべりをしないで先生の指示に従う。 ②わざと大きな音を出したり、大声で話したりしない。 ③体験中の友達の表情に注目する。	体験①：聞き取って書く 体験②：起立／着席時の雑音 一斉に九九 体験③：ひそひそ声でしりとり 体験④：話し合い活動(ひそひそ声 or 普通の声でテーマに沿って。話者は合図しないでそれぞれ口々に意見を出し合う)等 <ノイズを音場でかける>	試聴用補聴器 掲示物 (約束) 環境音 スピーカー
10分	5 学習のまとめをする。 <感想発表> ・補聴器体験の感想発表 <コミュニケーションの約束>	<ul style="list-style-type: none"> ・気づいたことを児童から挙げてもらい、こちらで4つのポイントにまとめる。 ①補聴器や人工内耳を大事にする ②口形を見せて、ゆっくり、はっきり話しかける。 ③大きすぎる声で話しかけない。 ④まわりも静かにする。	掲示物 (コミュ時の約束)

※4年生でも難聴擬似体験(ヘッドホン体験)が可能です。ただし、難聴理解学習を継続して実施され、1・2年生の内容が理解できていることが必須条件となります。

小学校5・6年生 難聴理解学習進行案（例）

時間	学習活動	留意点	準備物
1分	1 本時のめあてや活動内容を知る。	・めあての確認をする。	掲示物
4分	2 ・これまでの難聴理解学習の振り返りをする。 ・今年度初めての人は補聴器体験をする。	・既習内容を振り返る際は、子どもたちから発言してもらおう。 ・手がかりになる写真など提示する。（HAはどんな器械／試聴して感じたこと／擬似体験／コミュニケーションのポイント）	写真
5分	3 難聴擬似体験①(耳栓のみ) <u>聞き間違えるかも…</u> (全員)	・音場でノイズを流す。全員耳栓を装着する。 ・以下のような質問をする 朝ご飯に納豆を食べてきた人 動物を飼っている人 等 ○ねらいとする体験者の気づき 【何を指示されたのか分からない。→身振りや文字情報があると、内容を把握する手がかりになる→曖昧な音声情報で自他の言動を判断するのには不安がある。】	耳栓 ノイズ スピーカー
5分	4 難聴擬似体験②(聴+ヘッドホン) <u>みんなで○○</u> <全員で一斉に○○する> ・ヘッドホン、耳栓を外す。 ・体験の概要を聞く。	・国語の教科書（今やっている単元の一部を音読しよう） ・少し問答をしたり、意見を言ったりする。 ・九九や校歌の斉唱を促す。 ○ねらいとする体験者の気づき 【何をするのか分からない。楽しそうだけど一緒に楽しめない。自分の声が聞こえないから、うまく読めているか心配。】	教科書 ヘッドホン 耳栓 体験の約束
5分	5 難聴擬似体験③(聴+ヘッドホン) <u>みんなで並ぼう</u> ・ヘッドホン、耳栓を外す。 ・体験の概要を聞く。	・音声のみで動く。誕生日順に一列に並ぶ。 ・フルーツバスケット 等 ○ねらいとする体験者の気づき 【行動の目的が分からない。自信をなくす→ジェスチャーや書いた物を見ると安心する。】	
5分	6 難聴擬似体験④(聴+ヘッドホン) <u>いざ、という時は？</u> <地震の時の避難訓練> ・避難訓練を行う。 ・どういう支援があるかを話し合う。	・音声のみで地震の避難訓練を始めること、頭を守ること、おさまったら廊下に並ぶことを伝える。 ・体験者が活動についていけない様子でも、どんどん進める。 ○ねらいとする体験者の気づき 【急に周りが違う行動をし始めると戸惑う。行動の意図が分からない。置き去りにされると不安になる。】	
5分	7 難聴擬似体験⑤ <u>楽しくコミュニケーション!</u> <分かりやすい話し方って?>	・筆談、ジェスチャーなど ・手話があると分かりやすくなったときは、その場にいる人が知っていないと使えないツールであることを伝える。 ○ねらいとする体験者の気づき 【しっかりと伝え合うためには、正しいコミュニケーションの方法を覚えよう。正面から、口元を見せて、はっきりと、分かりやすいことばで。】	紙 筆記用具
10分	8 考えよう(読み聞かせ) 「どんなかんじかなあ」	・世の中には、様々な人がいることを伝え、感じ方を想像することが大切だと伝える。	本
5分	9 学習のまとめ	・感想用紙に記入し、感想発表をすることで、学習した内容の共有化を図る。	感想用紙 筆記用具

中学生 難聴理解学習進行案（例）

時間	学習活動	留意点	準備物
5分	1 本時のねらいや活動内容を知る。	・学習のねらいを確認する。	
10分	2 補聴器について ・補聴器の役割と仕組み ・補聴器の試聴	〈補聴器の試聴〉 ・一斉に笑う、各自おしゃべり、紙をめくる音などの騒音を聞く。 ・音のする方向のとらえ方を感じるように、正面や後ろから声をかける。 〈発問〉 「周りがうるさいと聞こえづらい。ちょっとした音も大きく感じる。正面から話しかけた方が聞こえやすい。どういう配慮が必要でしょうか？」	試聴器 ホワイトボード
10分	3 「聞こえにくい」ことについて知る。 ・DVD [Access]視聴 (30～90dB)	・聞こえ方に「ゆがみ」「ひずみ」があるという特徴を伝える。 ・視覚的イメージで追加説明をする。 「このような聞こえ方ですが、補聴器をつけても言葉がはっきり聞き取れるわけではありません。ゆがんだまま、音声が大きくなるのです。」	DVD AV 機器 提示資料
10分	4 軽度の伝音性難聴体験をする① ○書き取り ・耳栓をつけ、話者が話した言葉を聞き取って書く。 〈静かな環境〉 ① いし・きし・にし ② さかな・なかま・あたま 〈騒音下〉 ③ らくだ、さくら、あぐら ④ たべもの・たべごろ・なべもの ⑤ 放送室で校長先生がお話 しする。 校長室で教頭先生がお話 しする。	・体験内容が分かるように話題を伝え、発問する。 〈発問〉 「聞こえるけれども小さな音や声は聞こえにくい、という聴力の体験です。このような聴力の人であれば、もっと聞こえにくい聴力の人もいます。」 「周りがうるさくなると、聞きたい音や声聞き取れなくなることがありましたね。」 「また、話した言葉は、口の形が同じです。周りがにぎやかだと『食べ物』と『鍋物』などは間違えてしまうかもしれませんね」「これが勉強の場面だと、どうでしょうか？（感想を簡単に質問する）」	耳栓 スピーカー 書き取り用紙
10分	5 軽度の伝音性難聴体験をする② ○雑音が聞こえる中で自己紹介をする。 (氏名、誕生日、好きな食べ物) など	・聞こえにくい影響が感じやすいように、自己紹介の途中から雑音を流す。 ・体験内容が分かるように話題を伝え、発問する。 〈発問〉 「全員が小さな音や声は聞こえにくい状態で、相手に話したり、話を聞いたりする活動をしました。途中から、またにぎやかになりました。その中で聞いている間、どんな気持ちになりましたか？（感想を簡単に質問する）」 「このような友達がいたら、どんな手助けが必要でしょうか。」	スピーカー
5分	6 まとめ ・感想発表 ・当事者（難聴学級生徒）からのお願い（原稿）など	・生徒の発言や難聴の生徒の原稿から、支援の手立てとなるポイントを板書する。	感想用紙

難聴理解に関する参考図書一覧

書名	発行所	編著者	
難聴児童生徒へのきこえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために	財団法人 日本学校保健会	財団法人日本学校保健会 (各校の保健室に置かれているはずです。)	
「気になる子たち」理解教育のきほん クラスみんなで学ぶ障害理解授業の進め方	教育開発研究所	名城大学教授 曾山和彦	
難聴障害児の学力を高める学習指導 (上・下)	湘南出版社	柳生浩	
365日のワークシート ～手話・日本語・そして障害認識～	全国聴覚障害教職 員協議会	全国聴覚障害教職員協議会	
軽度児・生徒理解ハンドブック (通常の学級で教える先生へ)	学苑社	白井一夫・小網輝夫・佐藤弥生	
難聴児童生徒へのきこえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために	財団法人 日本学校保健会	財団法人日本学校保健会	
聴覚障害 (季刊紙)	ジアース教育新社	筑波大学附属聴覚特別支援学校 「聴覚障害」編集委員会	
難聴中学生の支援 ことば・学び・コミュニケーションそして自己像	難聴理解H B 事務局	白井一夫	
聴覚障害学生 サポートガイドブック (高校生以降のケースが対象となります。)	日本医療企画	白澤麻弓 徳田克己	
児童 向け の本	難聴理解の絵本 ハートはなにいろ	正文社	田原佳子
	バリアフリーの本3 耳に障害のある子といっしょに	偕成社	廣田栄子
	みんなで考えよう 障がい者の気持ち	学研教育出版	監修：玉井邦夫 石原保志
	発達と障害を考える本9 ふしぎだね！？ 聴覚障害のおともだち	ミネルヴァ書房	監修：倉内紀子
	どんなかんじかなあ	自由国民社	中山千夏
	わたし、耳がきこえないの	偕成社	トーマス ベリイマン

聴覚障害児に関わる教員に関する本・言語指導に関する参考図書一覧

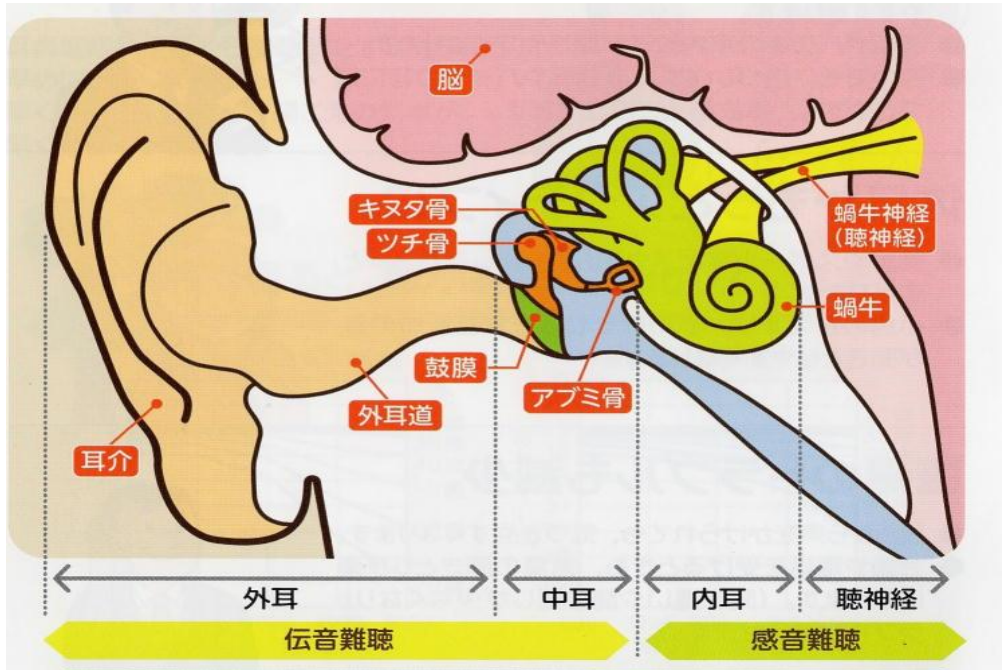
書名	発行所	編著者
聾学校における専門性を高めるための 教員研修用テキスト	全国聾学校校長会	全国聾学校校長会専門性充実部会
永年聾学校にいた者からの『ほんのひとこと』 (聾学校における授業改善の視点と方法)	聾教育研究会	坂本多郎
ことばを豊かに育てる100の事例	聾教育研究会	筑波大学附属聴覚特別支援学校
聴覚障害児の学力を高める学習指導 (上・下)	湘南出版社	柳生浩
確かな力をつける教科教育を目指して ～聴覚障害児の生きる力の育成のために～	聾教育研究会	筑波大学附属聴覚特別支援学校 小学部
たった一人のクレオール	ポット出版	上農正剛
捨てことば	(有) 邑心文庫	今西昭三郎

その他にも多数あります。詳細を知りたい方は、聴覚支援学校までご連絡ください。

耳の構造ときこえの仕組み

人間の耳は、下図のように外耳、中耳、内耳の3つの部分から成り立っています。外耳から入った音は鼓膜に達し、中耳のツチ骨、キヌタ骨、アブミ骨によって内耳に伝えられます。音の信号は、蝸牛の有毛細胞によって電気信号に変換され、蝸牛神経(聴神経)を通過して、脳に送られます。このように耳の各器官がそれぞれの役割を果たすことで、音をきちんと聞きとることができます。

耳のどこに原因があるかで、難聴の種類や程度が異なります。



< 難聴の種類 >

伝音難聴：音を伝える「外耳」や「中耳」の損傷や炎症によって、起こります。聴力の損失は中等度程度で音を大きくすればききとりやすくなるので補聴器の使用が効果的です。

感音難聴：内耳・蝸牛神経(聴神経)・脳の中核などの音を感じる部分の障害によって起こります。聴力の損失は、高度以上になることも多く、大きな音が響く・ひずむ、きこえても言葉の意味がわからない等の症状が現れます。補聴器の効果には個人差があります。

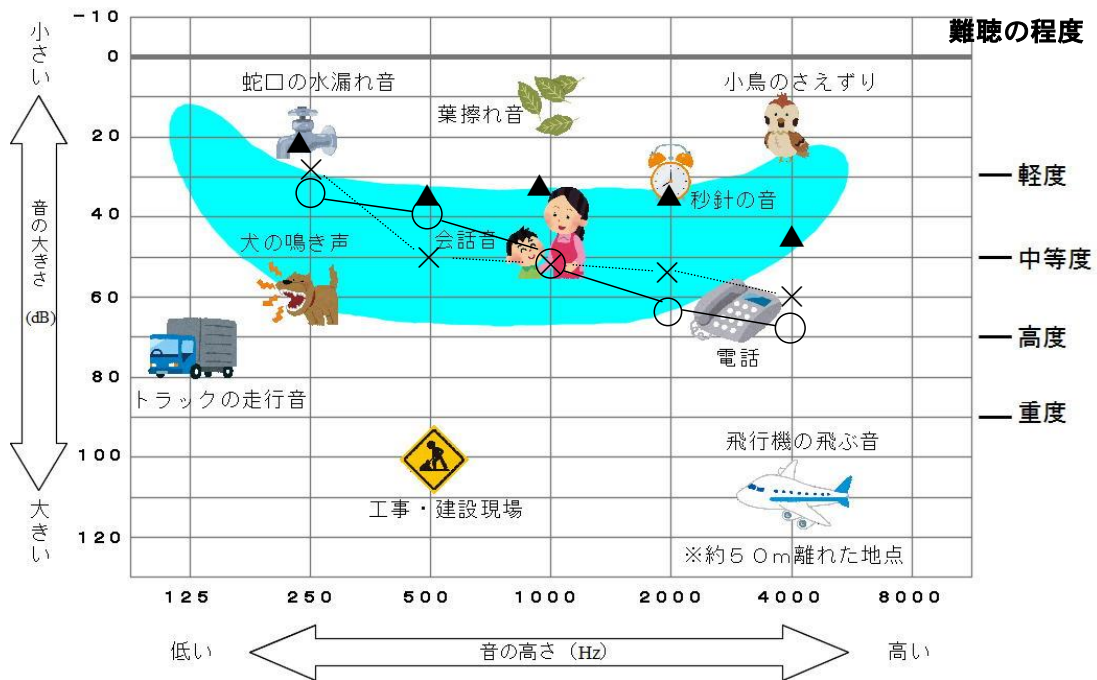
混合性難聴：伝音難聴と感音難聴、両方の原因によって起こる難聴です。

◆**両側性難聴** 両方の耳に難聴がある場合

◆**一側性難聴** 片方は正常で片方の耳に難聴がある場合

*一般的に言語発達や発音は正常ですが騒音下や難聴側の音がききとりにくい場合もあり、配慮は必要となります。

オーディオグラムの見方



オーディオグラムはきこえの程度をグラフ化したものです。

縦軸はきこえのレベルで大きさを表し、単位は dB (デシベル)、横軸は周波数で音の高さを表し、単位は Hz (ヘルツ) です。

聴力検査の結果は、一般的には、右の裸耳は○印、左の裸耳は、×印で表します。また、両耳に補聴器を装用しての検査の場合は▲印で表します。表には記載していませんが、△は両耳の裸耳の結果を表します。

印のある縦軸数字は、その人の聞こえる最小の音（最小可聴閾値）と言われ、例えば上記だと 1000Hz の右の裸耳（○印）では、50dB となり、50dB より大きい音は聞こえるということになります。水色の雲のような部分は「スピーチバナナ」と呼び、会話の音声範囲を表します。個人差はありますが、このスピーチバナナ内に補聴器の装用閾値が入るよう補聴器の調整を行います。

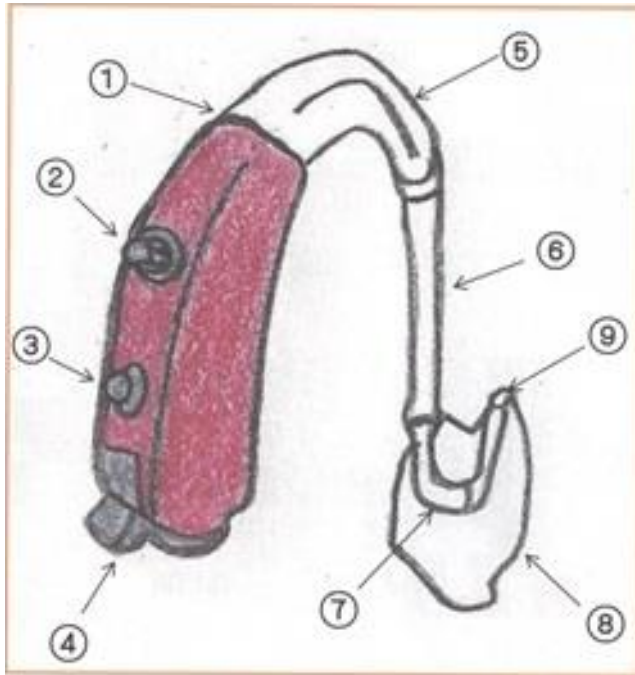
聴力は変動する場合がありますので定期的に医療機関で聴力検査を受けることが大切です。その際には、オーディオグラムのコピーをいただいて保存すると良いでしょう。また、学校現場では、補聴器を装用した結果（▲印）が実際の子ども達のきこえの参考になるので把握することが大切です。

しかし、オーディオグラムはあくまでもきこえの目安です。特定の周波数の純音を静かな環境でどの程度まで「きこえたか・きこえないか」を表しているだけにすぎません。実際の生活では、様々な周波数帯の複合音を雑音下できき取らなければいけません。オーディオグラム上で音が聞こえるということと生活の中で音や言葉をききとれる・理解するという事は全く同じではないことを理解することが大切です。

補聴器の仕組み

- ・マイクから音を入力→増幅→音を届けます。
- ・聴力によって増幅や出力制限が違います。
- ・内部に音の処理を行う小さなコンピュータのようなものが搭載されています。この精密さが性能や金額に関係しています。

例



- ①マイク
- ②ボリューム
- ③プログラムを切り替えるボタン
- ④電池カバー(電池を入れるところ)
開け閉めで電源スイッチになります。
- ⑤フック
- ⑥チューブ
- ⑦ジョイント
- ⑧イヤモールド(耳型) ※参照
- ⑨音口(音が出る場所)

★補聴器の種類によって場所や操作が異なります。担当のお子さんの補聴器で確認してみましょう。

〈筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部乳幼児教育相談(けやきルーム)「はじめのいっぽ」から〉

※イヤモールド(耳型)は、子どもの耳に合わせた専用の耳栓です。

補聴器業者さんに作ってもらいます。子どもの成長に伴って、大きさが合わなくなったら作り替えが必要です。

〈補聴器から「ピーピー」音がする時は・・・〉

「ハウリング(音漏れ)」です。イヤモールド(耳型)が耳から浮いて隙間から音が漏れると起こります。押し入れても止まらない場合は、作り替えや修正、補聴器の調整が必要な場合があります。

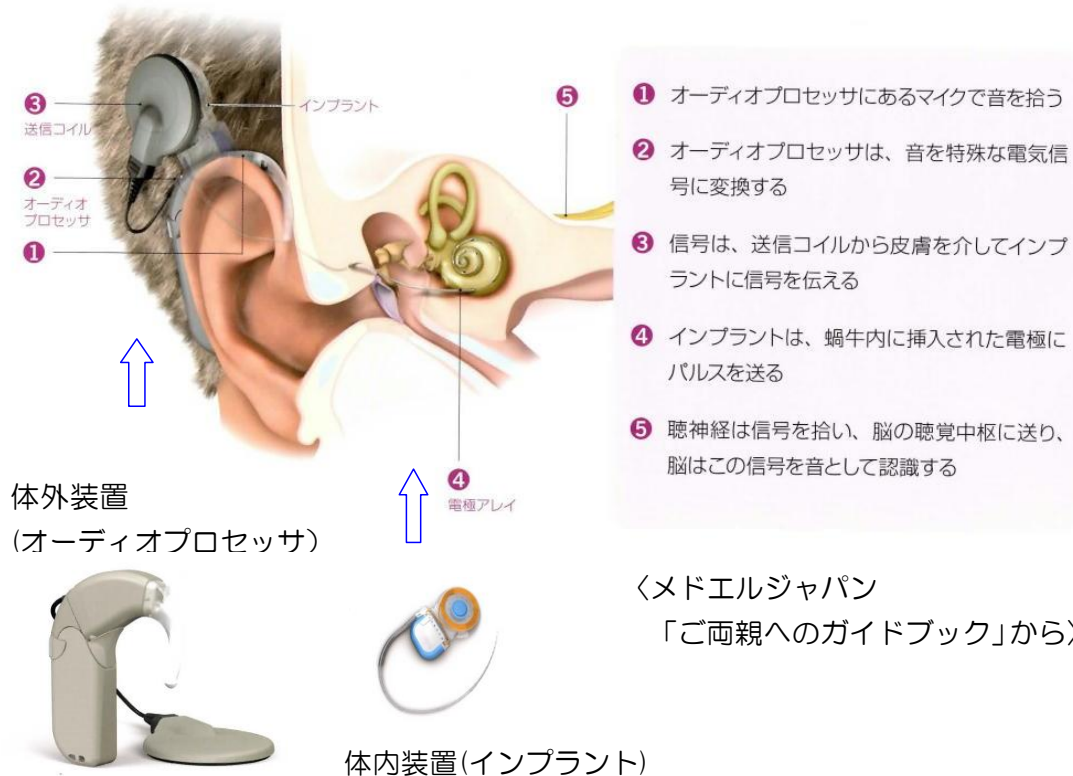
補聴器の管理

★補聴器は、熱や水・湿気・汗、強い衝撃、汚れや耳垢が苦手です。外した後は、乾燥ケースに保管(電池は一緒に入れない)するようにしましょう。また、直射日光の当たる場所には置かないようにしましょう。

★お子さんによっては、自分で補聴器の不具合を訴えられない場合もあります。電池チェッカーやステゾスコープを準備して、電池や音の確認をしましょう。ステゾスコープで音の確認をいつも行うことで、音の変化等、補聴器の不具合に素早く気付くことができます。

人工内耳について

適応基準があり、高度以上の聴覚障害に適応となります。適応年齢は原則1歳以上(体重8kg以上)とされています。該当になるかどうかは医療側の判断となります。音を増幅する補聴器とは異なり、内耳の損傷を受けた部分に代わって脳に音の信号を送る働きをします。対外装置のオーディオプロセッサと体内装置であるインプラントで構成されています。インプラントは体内に埋め込むため、手術が必要となります。

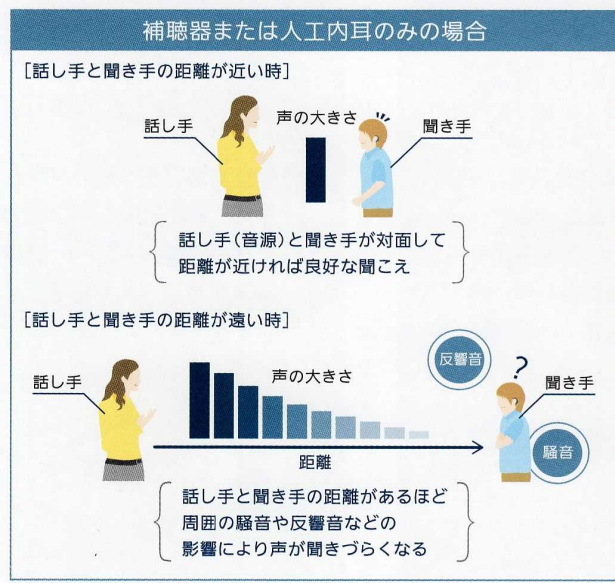


★人工内耳を装用すると、一般的には30~40dB程度の聴力レベル(軽度難聴程度)となります。ことばのききとりには、個人差があり、定期的なマッピングと(リ)ハビリテーションが必要です。

★補聴器や人工内耳の装用で、きこえはよくなりますが正常のきこえになったわけではありません。話し手の距離や雑音等はきこえにくさに影響します。

*特に一見きこえているように見えても聴覚障害を持つ子ども達は、あいまいな情報の中にいるということを我々は理解して、補聴援助システムの活用、話し手の配慮等、様々な配慮をしていくことが大切です。

補聴援助システムについて



補聴器や人工内耳は 1 m 程度の距離で対面して用いるのが最もきき取りに有効だといわれます。

図のように、音は、離れると減衰します。また、周囲の騒音や反響音等でことばがききとりにくくなります。

補聴援助システムは、話し手との距離や周囲の雑音に影響されることなく音やことばを届けるシステムです。聴覚支援学校では、磁気ループシステムや赤外線補聴システムの設備を整えています。

普通小中学校では、大がかりな設備を必要としない FM 補聴器やデジタルワイヤレス補聴援助システム(ロジャー)の使用が増えてきています。



* 聞き手が使用する補聴器・人工内耳に合わせて選択

〈フォナック「聴覚情報保障設備カタログ」から〉



話し手は、メインマイクの「タッチスクリーンマイク」をつけて話します。補助マイクの「パスアラウンドマイク」は友達の発表等を届ける時に効果的です。

聞き手は、受信機を使用します。いくつかの種類があり、使用している補聴器や人工内耳の種類によって選択します。

補聴援助システムは、音や声の情報を届けるためには非常に便利な機器です。しかし、万全なものではありません。視覚的な手掛かり、分かりやすい話し方等の聴覚障害児に対する基本的な配慮があってこそ、効果が発揮されます。

難聴理解学習 実践紹介

平成29年度は、全県で小学校14校、中学校4校、高等学校1校、大学2校で難聴理解学習を実施しました。その中から、難聴児が在籍する小学校2校の例をご紹介します。進め方、進行案等の参考にしてください。

実践紹介①（県南地区〇〇小学校〇年）

☆ P3の「理解学習までの流れ」に沿って理解学習を進めた学校の例

【理解学習の流れ】

①保護者、担任、担当での打ち合わせ

疑似体験をして、Aの聞こえにくさを体験し、どんな気持ちかを考えてほしい。



保護者

②ねらい、学習内容の設定

「聞こえにくい人の気持ちを考えよう」

- ・人工内耳の役割
- ・難聴理解カルタ
- ・聞こえにくい体験
- ・人工内耳をつけた人とのかわり方

③役割分担

- ・理解学習のはじめと終わりは、難聴学級担任が行う。



④理解学習の実施

- ◇子どもたちの様子に合わせて、臨機応変に対応
 - ジェスチャーや手話で確認
 - 難聴児に、「見て」「待ってね」「分かった？」等
 - ロールプレイでの確認
 - 「後ろから呼んでも聞こえない。どうしたらよいか」

日常的に難聴児が安心してやりとりしたり学び合ったりすることへの意識付けがなされている。

⑤評価

- ・理解学習のまとめの際に、交流学級児童が感想を発表。
- ・交流学級児童が感想用紙記入。



⑥3か月後の評価

- ・聴覚支援学校より小学校へアンケート用紙を送付。
- ・小学校にて児童の変容を記入し、評価。難聴理解についての実態を再確認し、指導を継続。



実践紹介②（県北地区〇〇小学校〇年）

☆学校生活で課題となる場面を具体的に想定した難聴擬似体験の例

1 題材名

「やさしさって何だろう」
（総合的な学習の時間）

2 ねらい

難聴擬似体験をすることで、
難聴を理解し、相手の障害に
応じて自分たちの接し方を考
えようとする態度を育てる。



☆ヘッドホン装着者

〔学習活動4体験2〕休み時間の遊びを想定。途中で
鬼ごっこのルールが変わる場面での難聴擬似体験。

3 学習計画（45分×2時間）

時間	主な学習内容
5分	1 難聴について知る。 ・感音性難聴の聞こえ方 ・〇〇さんの聞こえの状態
32分	2 難聴擬似体験（ヘッドホンを装着して聞こえにくい体験）をする。 （体験1）話を聞いて挙手をする。「話が聞こえる人」「男の子」「女の子」など （体験2）質問に当てはまる人は立つ。「青い服の人」「名札を付けている人」など （体験3）お互いの良いところを伝え合う。 （体験4）火災想定での避難訓練をする。
8分	3 ヘッドホンをして聞こえなかったときの気持ちや、体験者を見ていて感じたことをシートに記入する。
37分	4 聞こえにくい人へ伝えるためにはどうしたらよいか考える。 ・グループごとに話し合い、出された方法で実際に試す。 （体験1）休み時間に何をして遊ぶかグループごとに相談する場面 （体験2）休み時間に鬼ごっこをしている途中、急にルールが変わる場面 （体験3）休み時間遊んでいるとき、不審者侵入の緊急放送がなる場面 など
8分	5 学習の振り返り ・分かったこと、感じたこと、考えたこと、これから気をつけたいことについてシートに記入する。 ・記入したことを発表しながら感想を共有する。



つちこちゃん



きぬたくん



あぶみ先生



でんでんくん

つちこちゃん、きぬたくん、あぶみ先生は、耳小骨（つち骨・きぬた骨・あぶみ骨）から、考えられたキャラクターです。でんでんくんは、内耳にある蝸牛をモチーフに考えられました。

表紙・裏表紙イラスト 2017 ERIKO KAGAYA. kksc

初版発行／2017年4月

2版発行／2018年4月